野中旭の物語

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
野中旭の物語

【Ｎコード】
Ｎ７４９５Ｙ

【作者名】
学校嫌い

【あらすじ】
ある日の下校中、幼馴染み二人と歩いていると、黒い穴に吸い込まれある場所に飛ばされた。そこは荒れ果てた街。そしてドラゴンが跋扈する世界だった。

カ

さて、ここは・・・おそらく日本であることは間違い無いと思うけど、空を飛び回っている生物、そして今この人達が向かい合っている生物は何だろう？

形だけなら、漫画なんかでよく見るドラゴンと同じだけど、見たことはないし・・・。

でも実際目の前にいるわけで・・・。ここがどこなのか確認したいけど、そんな状況でもないのはいくら僕でも理解は出来る。亜美だったら間違いなくこの空気をぶち壊しにしていたと思うし、雫だったら混乱の余り動けなくなるかも知れない。

あの二人がどこに行ったのかも気になるし、直ぐにでも探しに行きたいけど、やっぱりこの状況をどうにかしないとそれも無理かな？

・・・・・・と、ここまで冷静に考えては見たけど、やっぱり戸惑ってるな・・・何だったんだろう？あの黒い穴は？周りを見てもそれらしき物はないし、今更気にしても仕方ないけど。

突然上空から大きな鳴き声、いや、咆哮の方がいいかな？

それが聞こえて見上げると、五人の人が対峙していたドラゴン（仮）とは別のドラゴンが僕めがけて真っ直ぐに降下してきていた。

反射的にバックステップで躱した時、体に異変を感じた。

軽すぎる。

穴に吸い込まれる前も体が鍛えてはいた。亜美も雫も結構人気があって、そんな二人といつも一緒にいる僕をよく思わない輩に喧嘩をふっかけられることもあったから。

――――何より、そんな奴らから二人を守りたかったから。

小さなら頃からずっと一緒だった。小学校で知り合ってからは、何故か僕も含めて三人共、惹かれあうようにずっと一緒にいた。それから僕と亜美はずっと同じクラスで、中学、高校となってもそれは変わらなかった。

雫は一つ上だからどうにもならなかったけど、ずっと僕たちと一緒にいてくれた。

感情の起伏が乏しい僕なんかともずっと一緒にいてくれた。

周りも最初は声を掛けてきたりはしたけど、僕の反応を見て暫くすると誰も声を掛けてこなくなった。

『ねえねえ！』

亜美を除いて。

彼女は転校生だった。

親の事情と言う奴だ。

そんな君が僕のことなんて知ってる訳もなくて、だから話しかけてきたんだろうと思った。別に僕は誰かに話しかけて欲しいとか、友達が欲しいとか思ったことはない。それが理由になると言うわけでも無いけど、僕はやっぱり君にも同じ様な反応をした。

それでも君は変わらなかった。

持ち前の明るさで毎日僕に話しかけてきた。

だからなのかな？

いつの間にか君の周りには誰もいなくなっていた。

ドラマなんかでよくある。

省られている人に接すると、その人も省られる。

正しくそれだった。

『ねえ・・・少しは笑おうよ？』

僕が、僕自身も分からず、どうして？と反応を返すと、君はやっと反応してくれた！と必要以上に喜んでいた。何がそんなに嬉しいの？と聞くと、やっぱり無視されてると思うと辛いから、と君はそう言った。

質問に答えてくれていないことを指摘すると、君は

『笑った顔が見たいだけ』

と満面の笑みで言った。

その笑顔を見て、多分僕は自我が芽生えて初めて笑ったと思う。

どうして、君にそう言われただけで笑ったのかは、僕も分からない。

それでも、僕はその時確かに笑ったんだ。

――――グオオオオオオオ！

再び咆哮が聞こえて、見ると地面に突っ込んだ頭を引き抜いたドラゴンがこっちに飛んできていた。

体が軽い理由は分からないけど、これなら思う存分力を振るうことは出来る。

二人を守る為の力がこんな未知の生物に通じるかなんて分からないけど、このままここで死んだら、本当に二人と二度と会えなくなる。

「そんなのはご免だ」

真っ直ぐ飛んでくるドラゴンを見据え、その鋭い爪でもって僕の命を狩ろうとしているドラゴンに突っ込む。

体が異様に軽いのはこの際気にしていられない。

怖いのは怖いけど、先ずはこいつをどうにかする。

ドガアアアア！

振り下ろされた爪を躱し、跳躍して額に踵落としを決め、着地する。今度は地面にバウンドして、浮き上がった顎をそのまま、両手を地面について両足で蹴り上げる。

これだけでこの生物を倒せる、なんてことは無いだろうけど、生物なら生きている。どうにかして心臓にでもダメージを与えることが出来れば、倒せるだろうけど、転がっている瓦礫なんかじゃ、こいつには通じないだろう。

かと言って、内部破壊なんてしたことはない。

そんなことをしたら、普通の人間は死んでしまう可能性だってある。

「どうすればいいかな？」

したことは無いけど、出来ないことは無いと思う。

要は衝撃を内部でぶつければいいんだから。

仰け反っているドラゴンの腹に潜り込んで心臓の場所に見当をつけてみようとするけど、そもそも僕は生物に詳しくはない。例え詳しかったとしても、ドラゴンなんて存在しない現代で・・・ん？

いや、ドラゴンは存在しないけど、ドラゴンに似ている生物なら存在する。

ワニや蜥蜴なんかはそうだ。

それなら。

おそらく心臓があるであろう場所を見つけた時、ドラゴンの頭がまた地面に付いた。このままだと押しつぶされると思い、駆けだして抜け出す。

ドラゴンは頭を振っている。

そして僕を捜し、何故かあの五人の方を向いた。そこでは赤いドラゴンと五人の人が戦っている。慣れている様子だけど、流石に二体もこんなのが来たら苦しいと思う。

その五人の方へ飛び立つドラゴンに駆け寄り、追い抜いた所で跳躍

し、胸の辺りに蹴りを入れた。

―――グギャ！

と変な声を出して、ドラゴンは今度は仰向けになって転んだ。

よほど苦しかったみたいだ。

てことは、心臓はあの辺でいいのかな？というか、生物の心臓の位置なんて殆ど一緒だっけ？あんなに難しく考える必要は無かったのか・・・。

苦しんでいるドラゴンに飛び乗り、思いっきり跳躍して

ドゴ！

渾身の踵落としを心臓辺りに決める。

―――グオオオオオオオォォ・・・・

最初は咆哮だったけど、最後の方は囁き程度の声になり、ドラゴンは動かなくなった。

その直後、また別の咆哮が聞こえ、振り向くと赤いドラゴンが地に伏した所だった。

向こうも終わったみたいだ。

とりあえず、ここがどこなのか、そしてこの生物はなんなのか？

それを確かめようと思い、ドラゴンから降りて、僕は五人の方へと歩いていった。

名

ドラゴンと戦った後、五人に話を聞こうとすると、何故か警戒されたけど、こちらには敵意はないことを両手を上げて伝えると、少しだけ警戒を解いてくれた。そして、金髪を側頭部で結んでいて、先の方がくるくるとなっている、ドレスの様な青い服を着たハッカーの少女が空中に突然ディスプレイの様な物を出現させ、凄い速さで操作を始めた。

その間に僕は両手はあげたままの状態で、五人の後ろに倒れている大きな赤いドラゴンを見てみた。

所々装甲の様な物があって、半端な威力の攻撃ではまず通らないと思う。それに、僕自身ついさっき戦ったばかりだから、少しは分かるけど、同じ種族であるなら皮膚の硬さも同等かそれ以上だと思う。

まあ、どうしてそんな生物を僕なんかが倒せたのか、というのは疑問だけど、今はどうにもならないか・・・。

はあ・・・腕疲れてきた。

多分こんな状況になったとしても、亜美なら笑ってるんだろうな・・・それで、雫は腰を抜かしているか、僕に飛びついてくるのか、どっちかになるだろう。

「二人ともどこにいるんだろう？」

知らず呟くと、首元に剣を突きつけられた。

不思議ととても遅く見えたけど、避けたら余計に面倒なことになりそうだから止めておいた。

金髪の女の子は、作業が終わったのか、少し後ろで警戒態勢を取っている。両サイドには黄色い服と短パンを着た赤い髪の少女とフードをかぶった男がそれぞれ女の子は銃を、男は手をこちらに突きだして構えている。

剣を突きつけている黒髪ロングにセーラー服の女の子の横には、サングラスをかけた大柄な男。

というか、たった一言しゃべっただけで、何故ここまで警戒されなければいけないんだろうか？

「ミカン、何か分かったのか？」

「分からない。どのクラスにも属していなかった」

「んなわけねえだろ？あんだけの力を持ってんだぞ？」

「本当。少なくともわたしのデータベースには記録されていない」

赤髪の女の子とフードの男の質問にミカンと呼ばれた少女は淡々と答えた。

「ナビには聞いてみたか？」

サングラスの男がこちらを睨み付けたまま（目は見えないけど）おそらく後ろの女の子に聞いた。女の子がそれに答えようと口を開き

かけた時、どこからかピピ・・・と電子音が聞こえた。
次いで聞こえてくる、コール13班という声。
声からして女の子で、多分まだ、幼い。
『帝竜の反応消失確認。ナツメさんがサンプルを持って帰還するようにとのことです』
「その前にこちらから報告がある」
『なんですか？今貴女が剣を突きつけている人ですか？』
「うん・・・ボク達がウォークライと戦っているとき、別のドラゴンが現れた」
『はい。ですが、そのドラゴンはどこかにいったのでは？反応がロストしていますので・・・』
黒髪の女の子がインカムらしき物に手を当てている。よく見ると、フードの男は見えないけど、他の三人にも同じものがあった。そして左腕には、なにかの生物を剣で貫いている絵の入った腕章をしている。
「いや、この男が倒したんだ。たった一人で」
『――――え？』

東京都庁付近にある地下シェルター。そこに僕は連れてこられた。そこにはおそらく双子の薄緑色の髪の女の子と男の子。めがねをかけた白衣を着ている男性に、青い服を着ている女性がいる。

その女性に、黒髪の女の子がさっきの赤いドラゴンのサンプル（？）を渡し、それを今度はめがねの人に預けた。女性は女の子達にむかって、帝竜と言うモノを討伐したことに対する労いの言葉をかけ、今日はゆっくり休むようにと言って、それを聞いた女の子達は部屋を出て行った。

金髪の女の子を除いて。

「貴女も今日は休んでちょうだい？疲れているでしょ？」

「大丈夫。それよりもこの人」

「分かったわ。それじゃ、この子も、そして私たちもあなたのことが気になるわ」

そんなことを言われても、僕だってまだなにも分からない・・・単にここだどこでどうなっているのかを聞こうとしただけで警戒され、剣を突きつけられれ・・・。

「気になるのは勝手ですが、まずはここがどこだか教えてくれませんか？いきなり飛ばされて、まだ少し混乱しているんですから」

「どこって・・・ここは東京ですよ。一体何を言っているんですか？」

「どこかに頭でもぶつけたのか？」

双子らしき女の子に続いて男の子がそう言った。

「仮にそうだとして、それによって気絶している僕が見ている夢なら、どんなにいいことか・・・。寧ろそうであって欲しいのに」

「は？おまえ、本当にここがどこだか分からないのか？」

「だから聞いているんだけど・・・。それで？結局ここはどこなんですか？街は崩壊しているわ、未知の生物が襲ってくるわで、何がなんだか」

そこまで言うと、やっと信じてくれた様で、この場所について説明してくれた。

この場所は東京で、一ヶ月前、突如来襲したドラゴンとそれと同時に現れたフロワロと言う花、そして魔物によって東京はほぼ壊滅。およそ９８％がドラゴンとフロワロによって浸食されたらしい。そのドラゴンの中でも、一際強い力を持ったドラゴンが帝竜。

先程のウォークライもその内の一体だそうで、後六体いるらしい。

そして、他にも東京のあらゆる場所にドラゴンがいて、どれ程の数のドラゴンがいるのかはまだ把握しきれていないらしい。

そんなドラゴンたちから東京を解放するべく、この女性、ナツメさんの指揮の下、ムラクモという機関を設立し、様々な能力に特化したS級の力を持つ者を集めたとか・・・。それが、さっきの五人。

それぞれ、サムライ、トリックスター、デストロイヤー、サイキッカー、ハッカーという五つのクラスに別れており、黒髪の女の子がサムライ。

赤髪の女の子がトリックスター。

サングラスの男がデストロイヤー。

フードの男がサイキッカー。

金髪の女の子がハッカー。

その五人が現在のムラクモの戦闘員で、別に13班とも呼ばれているらしい。

「大体のことは分かりました。それでは僕はこれで」

そういって踵を返し、部屋を出ようと思ったら、

「どこへ行くんですか？」

と聞かれ、僕はどこにも、とだけ答えて部屋を出た。

出た直後に誰かの声が聞こえたけど、気にせずに外に向けて歩き出

した。

のは良かったけど・・・。

「許可が下りなければ開けることはできない」

とシャッターの所に立っている兵士に突っぱねられた。

どうしようか？まさか殴り倒す訳にもいかないし、そんなことをしたら動けなくなるし・・・。

「良かった。まだいましたね？」

「ん？貴女は、さっきの」

声が聞こえて振り向くと、さっきの双子らしき二人の女の子の方が、慌てていたのか息を切らして立っていた。

「どうしたんですか？」

「少し気になったので・・・これからどうするんですか？」

「どうするも何も、ここから出られないので、どうもできませんよ」

シャッターを突き破って出るなんてことをしたら、どれだけの迷惑をかけてしまうのか。それ位は、話を聞いたばかりなんだから分か

る。でも、そとに出ないと、なにもできない。

二人も捜さないといけないのに・・・。

「・・・良かったら、わたしたちと一緒に戦ってくれませんか？」

「え？」

気付くと女の子が僕の目の前まで来ていて、真剣な表情で僕に言っていた。その目にも、同じく真剣な色が灯っている。

「いきなりこんなことを言うのが、変なことだということも勝手だということも分かっています。ですが、今のわたしたちには少しでも戦力が必要なんです・・・たった一人でドラゴンを倒したあなたの力なら尚更。・・・ダメでしょうか？」

「・・・・・・ダメかどうかと聞かれたら、ダメではありません」

「それでは！」

僕が言うと、女の子が嬉しそうに声を上げた。

「ですが、僕は捜さなければいけない人たちがいるんです。ですから、貴女たちと一緒に戦うことは、少なくとも今はできません」

ドラゴンなんて生物が跋扈している今の東京では、あの二人の無事は保障できない。僕みたいに身体能力が飛躍的に上がっているなら別だけど、あの二人は戦い方なんて物を知らない。初めは必死でなんとかしようとして、結果的に上手く行くかも知れないけど、そのまま終わってしまう可能性だってある。

そんなことになったら・・・。

僕の今までの鍛錬が全て無意味になってしまう。

二人を守る為に身につけた力なのに、守れなかったらなんの意味もない。

「その人たちは・・・貴方の」

「大切な人です。何があっても、守ると決めた」

「そう・・・ですか・・・」

その時、女の子はさっきとは打って変わって、とても悲しそうな表情をしていて、顔を俯かせてしまった。

「シャッターを開けてください」

「は？できませんよ。許可が下りていないんですから」

女の子が俯いたまま唐突に言った言葉に、兵士はそう返した。

「許可は下りています。この人の勧誘に失敗したら、出してあげるように、と。なんなら確かめていただいでも結構です」

「・・・・・分かりました。ですが、開いたらすぐに出てください。例え少しとはいえ、危険なことに変わりはありませんから」

僕はその言葉に頷きで返した。

程なくしてシャッターが開き、また荒れ果てた東京の地が見えてきた。

「それでは、僕はこれで」

外に出て、背後にシャッターが閉まる音を聞いていると、

「あの！せめてお名前を！」

と女の子の声が聞こえた。

振り向くと、あと少しでお互いの顔は見えなくなる所まで来ていた。

「旭。野中旭です」

名乗った時には、既にお互いの顔は見えなくなっていた。聞こえたかどうかも分からない。

そうだとしても、構わない。

これからか先、僕がムラクモという機関と関わることは、まずあり得ないだろうから。

僕が一歩踏み出すと同時に、背後のシャッターは完全に閉じた。

シェルターから出たはいいけど、まずは生活できる場所を見つけないといけないか・・・。辺りを見てみると、遠くには何か丸い物体がある。

「・・・とりあえず、あそこに向かってみよう」

もしかしたら亜美が興味を持って行っているかも知れないし、いないとしても誰かがいるかも知れない。

歩き始めて、近づいていく内にそれがなんなのか分かってきた。膨大な数の線路が集まって道を作っており、所々には浮いている線路もある。線路以外にも瓦礫なんかも・・・。

「魔物にフロワロ。それにドラゴン。今はこんなのが世界各国にいるのか・・・」

いくら、ドラゴンを一体倒すことができたとはいえ、見えるだけでもこんなにいるんじゃ無理か。追いつかれても逃げればいいかな？飛んでいる魔物とドラゴン以外なら、たたき落とせば上がってくるには相当時間が掛かるだろうし。

どれくらいの高さなのかは分からないけど、行けるとこまで行ってみよう。足場はいくらでもあるんだし、なんとかなるだろう。

と思っていたけど。

―――グオオオオオオオオオオ！！

「はあ・・・流石に考えが甘かったかな？」

背後には長い足を持つ大きな魔物と黄色い体のドラゴンが迫ってきている。

それに何か変な砲台のもあるし・・・。

線路のあちこちを跳んだりして移動してはいるけど、黄色い方は翼があるし、もう一体の方は脚力が異常に高く僕と同じように跳躍して追いかけてくる。

それに加えて電気を吐いてきたり、見るからに危険な色をした液体を吐いてくるわで、あまり余裕が無い。今の所電気は線路に当たっていないから、なんとも無いけど、線路に当たったら伝導してくるんだろうか？

もう一体の方の攻撃は当たらなければ問題はないだろう。

「それにしても・・・」

どうして体がこんなに軽いんだろう?結局そのことを聞くのは忘れてしまっていたし・・・まあ、別に分からなくてもいいんだけど。役に立っているならそれに超したことはない。

ある程度登った所で止まると、好機とばかりに黄色いドラゴンと足長の魔物が僕を挟むように立った。

「いい加減面倒だな・・・」

この短い時間で色々面倒なことがあって、結構疲れているんだけど・・・。

バチバチバチ!

黄色いドラゴンが吐いてきた電気を跳躍で躱すと、なぜか背後で爆発音がした。ちらと見てみると、足長に当たったみたいだ。僕が避けられないとでも思っていたのだろうか?

まあ、それで暫くは動けなくなったみたいだから、この間に黄色い方をどうにかしよう。

攻撃後の黄色いドラゴンの背中に乗って、また飛ぶ前に拳を連続で叩き込む。

それが効いたのか、ドラゴンはうめき声を上げて暴れ出した。振り落とされでもしたら堪ったものでは無いので、飛び降りると、ドラゴンは逃げていった。

そこまで効いたのか？

まあ、それならそれでいい。次は足長の方だ。

余程あの電気が効いたのか、未だ麻痺しているようで、僕が近づいても動かない。動けない相手を攻撃するのは気が引けるけど、放っておいて回復したら、いつまた襲ってくるか分からない。

「悪いね」

左足に力を込めて、腹に蹴りを入れると、足長は吹っ飛んで束になっている線路にぶつかり落ちていった。

電車が縦になって集まっている所に辿り着き、辺りの魔物と砲台を片付けて、そこで休むことにした。

布団なんか無いけど、この際そんなことは言っていられないし、落

ちる心配がないだけどありがたいと思うべきだろう。

ブレザーを毛布替わりにして、横になり、目を瞑ると、眠気はすぐにやってきて、僕はそのまま眠りに着いた。

『・・・ん！・・・・ヒさん！』

「ん・・・？」

耳元で何か声が聞こえる。

この声・・・どこかで聞いたような・・・。

『アサヒさん！起きてください！』

「！」

声がいきなり大きくなったので、ビックリして目が覚めた。

『やっと起きましたか』

「え？あ・・・インカムか」

目が覚めると、声がどこから聞こえていたのか分かってきた。耳に何かが填まっている様な気がして触れてみると、そこに何かがあって、見てはいないけど、そこから声が聞こえてきているのはすぐに

分かったから、多分そうだろう。

それに

「ミイナ・・・あまり大声を出さないでよ。ボクたちにも聞こえてるんだから」

「少しうるさい」

「貸しておいて正解だったな」

昨日の三人もいるし・・・。

後は、自衛隊かな？

軍服を着ている人と、一般人だろうか？女の子がいる。年は多分雫と同じくらいだろう。

『あ、すみません・・・』

黒髪の子に言われて声の主は少し落ち込んだ。

「あ、昨日の女の子」

落ち込んだ声で思い出したのはどうかと思ったけど、昨日の落ち込んだ時と同じ声だったんだから仕方ない。

『良かった、覚えていてくれたんですね？』

「・・・うん」

途端に明るくなられたので、どう答えたらいいか少し悩んだけど、頷いておいた。

「おい、ミイナ。できるだけ早く終わらせろよ？俺たちだって急いでるんだからな？」

『あ、はい。分かってます』

「あ・・・急いでるなら、移動しながらでもいいですよ？僕もここには二人を捜しに来ていたから、上に行くつもりでしたし」

『そうですか？』

「ええ」

「なら早く行くぞ？ああ、一応名乗っておく。俺はガトウだ。よろしくな？」

「あ、野中旭です」

その後、ブレザーを着て、体を解しガトウさんたちと進むことになり、自己紹介だけでもしておいた方がいいと思い、女の子達にも名乗った。

「ボクはサクラ。よろしくね？」

昨日とは違って、剣を抜こうともせず手を差し出してくれた。

「はい。よろしくお願いします」

僕はその手をとって握手をした。

「ミカン」

「リコだ。よろしくな？」

二人とも握手をして、後ろにいる女の子を見てみると、あちらも僕を見ていた様で目が合った。

「どうも！アオイです！」

元気に名乗ってきたアオイという女の子の勢いに押されて、少したじろいだ僕の手を、彼女は両手で握りブンブンと振った。

『アオイさん！』

『！』

『ぁ、すいません・・・』

また女の子が大声を出したから、僕にインカムを貸しているリコ以外はみんな耳がキーンとなった。

「ミイナ・・・」

女の子の名前はミイナと言うらしい。

「ミイナ・・・良い名前だな」

『え・・・？』

「あ」

知らずの内に声を出してしまっていたことに遅れて気付き、慌てて口を押さえたけど、既に手遅れだった。

何か言おうとしたけど、言葉が出てこなくて、意味もなく辺りを見回しているとキラリと、何かが光ったのが見えた。

僕が寝ていた所の近くに鏡が落ちていて、おそらく光ったのはそれだ。

「・・・・・・」

何故だか、分からないけど、それが異様に気になって近づいて拾い、見てみると周りを七色に縁取られた綺麗な鏡だった。

写るのは自分の顔だと分かっていながらも、その鏡を覗き込むと、そこに写っていたのは僕ではなく

「『え？』」

探していた幼なじみ

『あ・・・あ・・・旭！』

そして恋人である雫がいた。

決

鏡を使って、飛ばされた後のことを報告し合い、それから何があったのか等も話し合った。でも、どうやら雫の飛ばされた所では、亜美は見つかっておらず、時間の流れにも大きな差があり、雫のいる世界、テルカ・リュミレースでは一年の時が流れているみたいだ。

確かに雫は少し大人っぽくなっている。

こっちではまだ一日しか経っていないことを伝えると、雫はかなり驚いたみたいで、叫び声を上げた。その声は、こっちにいるみんなにも聞こえたみたいで、一番興味を示したアオイさんを筆頭にムラクモのみんなも寄ってきた。

アオイさんを見て、雫はあからさまに不機嫌な様子になって誰？と聞いてきたけど、僕もまだ名前しか知らない。そのことを伝えると、納得はしたようで、また機嫌は戻った。

『旭の彼女券幼なじみの狩谷雫よ。よろしくね？』

少し大人びた表情で雫はそう言った。

その時、シズと呼ぶ声が聞こえて、後を見てみたけど、みんな自分じゃないと言うように首を振った。

『あ、紹介するね？こっちで今、協力してもらってる、ゴーシュとドロワット』

鏡を少しずらすと、そこには二人の女の子がいた。
髪型は二人とも同じようにしていて、服装も殆ど同じ。尤も鏡だから全身が見える訳ではないから分からないけど。
『探してた幼なじみの一人。野中旭よ。こっち風で言えば、アサヒ・ノナカ』
鏡に映っているのが自分たちでないことに驚いているであろう、二人に雫がそう紹介してくれた。

でも、確かに普通はこうなるのが当たり前だよね・・・。

鏡を見たら自分じゃなくて、全く知らない人が映ってるんだから。

「どうも。雫がお世話になってます」

『え？あ、ああ・・・いや、私たちもシズには色々助けられているよ』

『そうそう！シズちゃんのごはんとっても美味しいんだよ！』

「え？雫がごはんを？」

『何よ？そんなに意外？』

鏡がまた急に雫を移した。背後ではアオイさん達が驚いたのが何となくだけど、分かった。

「だって・・・雫、料理殆どできなかったでしょ？」

向こうにいた頃の雫の料理は・・・いや、あれを料理を言っていいのか分からないけど。

とにかくとてもうまいとは言えなかった。二重の意味で・・・。

「でも、そっか・・・料理、できるようになったんだね？」

『・・・うん。ねえ、また会えるよね？』

雫は不安を露わにして聞いてきた。

「当たり前だよ。また、三人で一緒に過ごそう？」

『旭・・・うん！』

雫が返事をしたのと同時に

「！雫！雫！」

鏡は暗くなり、次に光った時には、そこに雫は映っていなかった・・・。

＊

「ありがとうございました。アサヒさんのお陰で、ガトウさんは死なずに済みました」

「いえ」

「おまえのお陰で助かった。俺からも礼を言う」

鏡が普通に鏡に戻った後、本部で調べれば何か分かるかも知れないとミイナさんが言ったので、僕も一緒に行くことになった。

でも少し進んだ所で巨大な砲台があり、ガトウさんはその砲台からアオイさんを庇った。寸での所で僕が発射口を地面に叩きつけたことで、なんとか直撃は免れたけど、爆風が発生して、それによってガトウさんは地面に叩きつけられて気を失ってしまった。

砲台を破壊した後、予想外のことが起こった為か、なにやら決行していた作戦を中止して本部に戻ることになった。

ベッドの脇に立ってお礼を言ってくるミイナさんと、寝た状態のまま礼を言ってくるガトウさん。

「それにしても、アサヒさんはどうしてあんな力を持っているんでしょうか？」

それについては僕も聞きたかったけど、今はそんなこと聞ける状態じゃ無いだろうし・・・。鏡も依然として普通の鏡のままだし・・・

。

はあ。

「それで？」

「「え？」」

僕とミイナさんの声が重なった。

「え？じゃねえ。お前、これからどうするんだ？一人で今の東京を彷徨くのは自殺行為だぞ？」

「でも、アサヒさんなら・・・あ、いえ、確かにそうですね」

あれ？最初は否定仕掛けてなかった？

まあ、いいか。

「雫の無事が分かっただけでも、収穫は合ったんですが、亜美の行方は依然分からないままですからね・・・。探しに行きます」

「え？ここに残らないんですか？」

「？そうする理由がありませんが？まあ、少なくとも鏡のことが少しでも分かるまでは、付近で野宿して過ごしますが」

元より僕は、ムラクモとは一切関係がないし、ここって結構避難してきた人達もいるみたいだから、部外者どころか他界者の僕がここにいるわけにもいかない。

「一応携帯のアドレスを教えておきますので、何か分かったら知らせて下さい」

紙に番号とアドレスを書いて、鏡と一緒に渡し

「それでは、僕は近辺を探してきます。ガトウさん、くれぐれも無茶なことはしないようにして下さいよ？ミイナさんも、ナビゲーターの役目は大変でしょうけど、しっかり休養も取って下さいね？」

「おう。またな？」

「はい」

鞄を持って、医務室から出て、エレベーターに乗ってエントランスに出た。そのまま外に向かっていこうとしたら、ナツメさんに呼び止められた。

どこから現れたんだろう？

「なんですか？」

「あなた、私たちと一緒に戦ってくれないかしら？」

「お断りしますよ。ついでに言っておきますが、僕は貴女が苦手です」

何となくだけど・・・。

「探してる子も見つかるかも知れないわよ？」

「言いましたよね？苦手だって。そんな人に頼ろうとは思いませんよ」

あ、それなら鏡も調べてもらうわけにはいかないか。

ナツメさんは素通りして、またエレベーターに乗り、２階に上がると、丁度ミイナさんと会った。

「あ、アサヒさん！どうしたんですか？」

「いえ、鏡を返してもらおうと思いまして。まだ持ってますか？」

「え？持ってますけど・・・どうしてですか？」

「よく考えたら、鏡を調べてもらうということは、ムラクモの、ナツメさんの力を借りるということなので。僕はあの人が苦手なので、その人の組織に頼りたくは無いんですよ」

本当にどうしてか分からないけど、僕はあの人が苦手だ。何を考えているのか全く見当が付かない。

だけど、何かとんでもないことをしでかしそうな気もする。

「・・・・・・それなら、残って様子を見た方がいいのかな？」

何か行動を起こしたら止めることだってできるかも知れないし・・・。

「う～ん・・・」

「・・・あの、悩んでいるみたいですけど、そう無表情だと悩んでいる様に見えません」

それもそうか。

「うん。決めました。ミイナさん、頼んでも良いですか？」

「え？あ、はい！わたしにできることなら何でも！」

一瞬分からないような顔をしたけど、すぐに大きな声でそう言ってくれた。

「ありがとうございます。それでは――」

決（後書き）

旭「作者さん。もう少しちゃんと書けないんですか？」

作「・・・・・・・」

旭「誰にも読んでもらえなくなりますよ？」

作「・・・・・・・」

旭「文体も滅茶苦茶だし、内容もわかりにく「あの、アサヒさん？」
え？あ、はい？」

ミ「作者さん、眠気に負けて既に寝てます」

作「ぐ～・・・ぐ～・・・・」

旭・ミ「・・・・・・・」

ミ「どうしましょう？」

旭「放っておきましょう。こんな作品ですが、これからもよろしく
お願いします」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7495y/

野中旭の物語

2011年11月29日22時54分発行